研究発表　分科会 9-1　言説と批評 10 月 15 日（日）13：20-14：00　南館 2B41

17 世紀フランス宗教画と grâce の概念
―― アンドレ・フェリビアンの美術批評をめぐって

慶應義塾大学　望月 典子

フランス 17 世紀は、世紀半ばに設立された王立絵画彫刻アカデミーを中心に、ルイ 14 世治下、王とフランスを称揚する美術が展開し、文化全体の世俗化が進んだ時代である。他方、フランス・カトリック改革の影響で、聖堂装飾や祭壇画制作が盛んに行われ、個人の愛好家に向けたタブローにも宗教主題が頻繁に描かれるなど、宗教画が隆盛した時代でもあった。聖と俗は拮抗しながらも、その境界線は近代に向けて大きく変化しようとしていた。

本発表では、そうした聖俗の関係を探る上で重要な概念である grâce を取り上げる。ヴァザーリ以来、「優美 grazia」は重要な美学的用語となったが、16～17 世紀にはこの美学的意味は、神学的意味の「恩寵」と密接に結びついていた。ところが、17 世紀のフランスでは、カトリックとプロテスタントの間で、またイエズス会とジャンセニスムの間で、恩寵と自由意志に関する神学論争が激化し、神の恩寵と個人の体験を分離したカルヴァン派やジャンセニストの考えが、美学的な優美の概念と互いに連動し始めた。それが、宗教画を従来の宗教的機能から切り離し、自律した絵画として、観者に感覚的な愉悦をもたらす効果(とりわけ彩色)に目を向けさせる、無視できない要因のひとつになったのである。そしてその流れに掉さしたのが、フランスにおける美術批評家の先駆者のひとりアンドレ・フェリビアン(1619-1695)であった。その点を明らかにしつつ、この批評家の重要性を絵画の世俗化と自律性という観点から再考してみたい。

フェリビアンは基本的に絵画の構想と素描を重視し、精神に訴える歴史画を評価するが、同時に観者の感覚(眼)を楽しませる彩色の効果にも一定の理解を示した。彼は 1660 年代の言説の中で、明確に美と優美を区別しており、美は対称性や比例といった客観的な規則と結びつくのに対し、優美は、規則を越えて、魂の内的な動きや感情によって引きおこされるものだとし、さらに超越的な次元をもつ je-ne-sais-quoi の概念、「神の輝き」とも結びつけた。フェリビアンにはアビラのテレサの『霊魂の城』の翻訳など重要な宗教関連の著作があり、カトリックとして神秘思想に傾倒していたことが窺えるが、若い頃からプロテスタントの画家やジャンセニストとの交流もあった。神学論争には関わっていないものの、次第に彼の優美の概念から神的な側面が希薄化し、眼を打ち、魂を揺さぶる色彩の得も言われぬ効果が浮上していったのである。

本発表では、フェリビアンの言説と、grâce の二つの意味が織りなす道筋を辿ることで、優美が神から引き離され、神が内在しない表象の物質性そのものが評価されるに至る様子を確認し、さらにそこに、フェリビアンが最高の画家とみなしたニコラ・プッサンのタブロー、まさに恩寵がテーマの宗教画《聖パウロの法悦》に関する言説の分析を組み込み、この時代の聖俗の相克と絵画の自律化の内実を浮き彫りにすることを試みる。